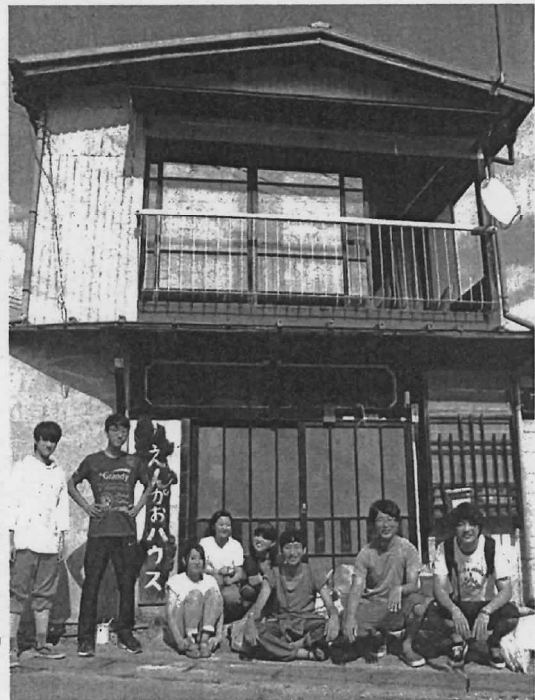


若者の活動拠点完成

空き家改修 休憩、宿泊に



改修を終えたえんがおハウス

大田原 高齢者支援の「えんがお」

【大田原】若者の方で高齢者を支援する一般社団法人「えんがお」は23日までに、空き家を改修した休憩宿泊所「えんがおハウス」を山の手に丁寧に整備、本格的な運営を始めた。若者の交流スペースとして活用し、同法人の活動に参加する市外の学生らが宿泊できる。浜野将行代表理事(27)は「夢に挑戦する若者が、疲れたときにゆっくり休める場所になりたい。気軽に訪れてほしい」と話している。(直井萌乃)

地元住民も整備に協力

空き家は地域住民から譲り受けたもので、築61年の木造2階建て。えんがおの活動拠点「みんなの家」の目と鼻の先にある。1階は掘りごたつを囲んで集まれる居間、2階には男女各1部屋の宿泊部屋を確保し

た。浜野さんは「多くの人の力を借りることができ、地域づくりを『自分ごと』に感じてもらえたと思う」と感謝した。

えんがおの活動には、市外の学生や生徒が年間延べ500人参加するという。休憩宿泊所の整備は大田原まちづくりカンパニーや市中心市街地活性化協議会のアドバイスがあったといい、若者同士の交流を深め互いの意欲向上などにつながる狙いがある。

改修に関わった黒磯南高1年、菊地奏太さん(16)は「大人数で泊まっているいろいろな話をするのが楽しい。ここを拠点に、えんがおに関わる人が増えていくと嬉しい」と話した。問えんがお0287・33・9110。

改修を始めたのは今年3月。地元住民や学生など計約50人が畳の張り替えや風呂場の修理、外壁の塗装などに当たり、今月8日、完成にこぎ着けた。寄付金は約20万円集まっ



塩谷

塩谷の夜空に無数の星がまたたく。「きれい」。あちこちで歓声が上がった。環境省の全国星空観望観測の定点観望地だった塩谷町。星空の美しさを誇る町に2002年、廃校を活用して誕生した宿泊型体験施設「星ふる学校くまの木」だ。

14年 星ふる学校くまの木オープン

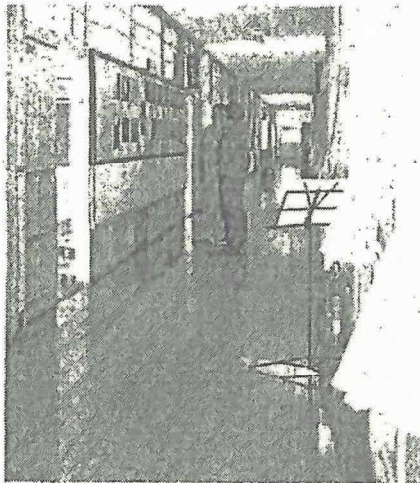
【写真】星ふる学校くまの木 木造平屋の棟に教室を活用した定員8名のほか、学習室や資料室、食堂などを備える。大型バスも駐車可。宿泊061。



昨年未、同所で行われた星空観望会に足を運んだ。澄んだ冬の空気に輝きを放つオリオン座、北斗七星、目を凝らせばアレキサンドリア星団(すばる)も。さらに、この日は、ふたご座流星群が極大を迎えた絶好の観望日。寒さに身を縮めながら、じっと待った。15分後、一筋の光が、慌てて願い事を唱えた。「タカラク！」

施設はNPO法人「くまの木里の暮らし」が運営。餅つきやハイキング、わら細工など豊かな自然と里の暮らしを楽しめる四季折々の体験プログラムを提供している。中でも、やはり星空観望会の注目度は高い。同施設の前身は1999年に閉校した熊ノ木小。子どもたちとともに124年の歴史を刻んだ木造校舎は、今も高原山のふもとに力強く存在し、年間約6千人を迎える地域のシンボルの存在になっている。「学び舎の姿をそのまま

廃校活用、町のシンボルに



残してほしい」。それが地元住民の願いだった。廃校をどのように活用し、運営していくか。校舎二室、行われた町担当者と住民による「ふつかり合う時もあった。良質な木材を使用して建築された木造校舎、その輝きは衰えない」と振り返り「役場生活で

議論は、約2年間、70回 番の思い出と懐かしむ。県内で少子化を背景に学校の統廃合が進む中、「くまの木」は廃校利用を地域振興につなげようとする取り組みの先駆けとなった。だが、それだけ地元の方々が真剣だったということ。懐かしみの2棟の校舎はそれぞれ1935年、1955年に建設された。校舎いっぱいに漂う木の香り、ワックスでピカピカに光る床。小学生時代を木造校舎で過ごした記者にも、不意に懐かしさが込み上げる。古い校舎には戦後の名残も。北側の窓枠にはめられた小さなガラス一枚一枚に掘られた「木」の文字。貧しい生活の中、学校の物品が、まれないよう、当時の児童らがくぎのようなもので懸命に補修を付けた跡だ。同窓生で教師としても同校に赴任したことがある同町上寺島の大岡編患さん(52)は「子どもの頃から思い出を残しながら、生まれ変わりを、塩谷町の良所がたくさん詰まってる。東京や神奈川、埼玉、千葉などから訪れる利用客が全体の8割を占め、修学旅行や家族旅行のほか、高齢者のグループが同窓会で利用する」ともあるという。「地域の人たちに見守られ、支えられているおかげです。17年後、校舎100歳のお祝いをしたい」とは同法人の加納麻紀子事務局長(45)。「神奈川県出身。住民の力でヤギを飼いはじめると自身も田舎暮らしを楽しんでいるようだ。郷土の小学校を愛し続ける地元住民の思いが木造校舎のぬくもりと重なり、訪れる人々を癒やしている。」(小林睦美)